

中世イングランド司教の統治戦略

— ハーバート＝ロシंगाを中心に —

山代 宏道

【キーワード】中世イングランド、イースト＝アングリア、ノリッジ、司教、統治戦略

はじめに

中世イングランドのイースト＝アングリアにおいて修道院が建設された動機について、T. ベステルは、建設者による魂の救済への願いとともに、政治と教会とが協同したところで修道院建設がもった象徴的重要性に注目している。修道院の立地は社会的・政治的脈絡の中で決定されていた。また、多くの修道院が世俗力を示すことを重視していたと主張されるが [Pestell, MFS, p.199]¹⁾、この点は、司教たちについても同様のことが言えるのではないか。ここでは司教座附属修道院をもっていたノリッジ司教、とくにハーバート＝ロシंगा (Herbert Losinga, 在位 1091-1119年) の事例を取り上げて、かれの司教区統治に見られる「戦略」を明らかにしていきたい。

ベステルは、1120年までにイースト＝アングリアで建設された33修道院の分布を示しているが [Pestell, MFS, p.200 Fig.1; Pestell, Landscape, p.164 Fig.37.]²⁾、それらの事例に見られる特徴は、城と修道院の結合、すなわち領土の根拠地がもつ属性と関係した修道院建設であった。1120年までに、12の海外修道院附属子院 (alien cells) をのぞく21の修道院のうち7つが城付近に建設された。4つがノリッジ司教座附属修道院の子院であった。例外は Binham 修道院であり、それは St Albans Abbey の子院となる。また、9の修道院は城と分離していたが、3つは現存の小教区教会の場所に建設されたもの (Edwardstone, Hempton, West Acre) であり、大部分はアウグスティヌス派修道院として建てられたものであった [Pestell, MFS, p.203]。

1120年までに、修道院の景観は建設場所と建設者についてはシステムティックなものとなっていた。例外は5つの修道院を建設したノリッジ司教ハーバート＝ロシंगाであったが、かれの場合、建設動機として「王朝的関心」(dynastic interests) と呼べるものを指摘できるのかもしれない。かれは修道院建設に際して独自の政治的意図をもっていたようである [Pestell, MFS, p.203.]³⁾。

1 ハーバート＝ロシंगाの経歴

13世紀ノリッジ司教座附属修道院の修道士で年代記作者である Bartholomew Cotton によると、ハーバート＝ロシंगाは、ノルマンディーの Oximin 地方の生まれであったようである

[Saunders, First Register, f.1; Harper-Bill, Acta, p.xxviii; Wollaston, Herbert, p.22.]。そして、ノルマンディーにあるフェカンブ修道院の修道士から、副修道院長にまでなったベネディクト派修道士であった [Pestell, MFS, p.204.]。さらに、ノルマン征服後のイングランドに渡りラムゼー修道院長となる。かれがなぜ、同修道院長になれたのかという疑問に関しては、F. バーローの見解が示唆的である。征服後、国王ウィリアム1世（在位、1066-87年）やカンタベリー大司教ランフランク（在位、1070-89年）は、新たに任命される修道院長としては次のような資質が必要であると考えていた。すなわち、修道院長は、その聖性と学識はもちろんであるが、それだけでは十分でなく、強さと決断力、さらに十分な世俗的知恵（*prudentia*）が必要とされた。こうした点で著名であった修道院長が、セント＝オーバン修道院長ポール（在位、1077-93年）、ウエストミンスター修道院長ギルバート＝クリスピン（在位、1085頃-1117 / 18年）、そしてラムゼー修道院長（在位、1087-1090 / 91年）となったハーバート＝ロシングである [Barlow, 1066-, p.186; HRH, EW, p.62.]。C. ハーパー＝ビルは、1087年ウィリアム2世がハーバートを修道院長に任命したと指摘している。任命者がウィリアム2世であったとしても、当時の修道院長について期待された資質は同様であろう。12世紀の歴史家オルデリック＝ヴィターリスは、ハーバートがウィリアム2世の国王チャプレンの1人であり、寵臣であったとしている [Harper-Bill, Acta, pp.xxviii-xxix.]。

その後、ハーバート＝ロシングは、国王ウィリアム2世（在位、1087-1100年）のときに、イースト＝アングリア司教となるのである。かれが司教に就任したとき、司教座はセトフォード（Thetford）にあった。1070/71年頃にイースト＝アングリア司教 ハーフファースト（Herfast, Erfast, 在位1070-1084 / 85年）によって同地に司教座が移動されていた⁴⁾。バーローは、ハーバートがウィリアム2世の「友人」であったとみなしているが、少なくとも、国王の「心になかった人物」であったことは間違いない。かれは司教に任命されるためにシモニア（聖職売買）の罪を犯したとして、1094年ころローマ教皇庁に出向きウルバン2世（在位、1088-99年）に対して悔悛行為をおこなった。そして、ローマ教皇により司教に叙階されている。

聖職売買の内容は、ハーバートが、国王ウィリアム2世に対して、1,000マルクを支払って、父親のためにウィンチェスターのニューミンスター（ハイド）修道院長職と、自分のためにセトフォード司教職を得たというものである [Hollister, Henry I, p.150; Harper-Bill, Acta, p.xxix.]。ウルバン2世を教皇として承認していなかった国王ウィリアム2世と一時的に対立することになったが、まもなく和解している。ところで、ウィリアム2世にとってのハーバート＝ロシングの具体的な貢献内容が何であったのかが問題となるであろう。しかし、この点は、それほど明確ではない。ハーバート側から国王への金銭の支払いは無視できないが、他方で、国王が、1087年即位直後の反乱鎮圧のためにあらゆる支援を必要としており、善政を約束したり、教会の空位司教職を埋めていったことにも注目すべきである [山代『ノルマン征服』 p.61.]。また、ハーバート

はその学識ゆえに尊敬され、国王にとって「有用な人物」となった [Barlow, 1066-, p.68; 山代『ノルマン征服』 p.151; Wollaston, Herbert, pp.23-24; Pestell, MFS, p.204; Dodwell, Herbert, pp.38-39; Harper-Bill, Church & World, p.284; WM,GRA, I, p.587.]。

ハーバート＝ロシंगाは、教会改革をめぐるカンタベリー大司教アンセルム（在位、1093-1109年）と国王ウィリアム2世との対立において、国王側を支持していた。たとえば、1095年ロッキンガム会議における彼の態度にそれが見られた [E, HN, p.53-67; 山代『ノルマン征服』 pp.67-8.]。司教ハーバートと国王との関係はおおむね良好であったようである。ヘンリー1世の治世（1100-35年）においても、ハーバート＝ロシंगाは常に国王の忠実な臣下であった [Wollaston, Herbert, p.26.]。ヘンリー1世は、ハーバートの外交能力を高く評価していたようで、カンタベリー大司教アンセルムとの叙任権闘争において、国王側を代表する3人の司教たちのひとりとして、1101 / 2年にローマへ派遣された。あとの2人の司教たちは、ヨーク大司教ジェラルド (Gerard) とチェスター司教 Robert of Limesey であった。興味深いのは、司教ロバートも、この時期、かれの司教座を十分な基本財産をもつコヴェントリー修道院へと移動する承認をローマ教皇から得ようとしていたという事実である [Hollister, Henry I, p.150.]。その点では、ベリー＝セント＝エドムンド修道院への司教座移動を意図した司教ハーバートの意図と似ている。この旅行の途中で、司教ハーバートはリヨン伯ギーに捕らえられ、身代金を支払わされている [Wollaston, Herbert, p.26; E, HN, p.132.]。ホリスターは、この身代金が教皇庁での活動資金であった可能性を示唆しているが [Hollister, Henry I, p.152.]、その資金を身代金として使ったのだとしたら、教皇庁での当初の目的が実現困難となったであろう。結局、ローマ教皇パスカル2世（在位、1099-1118年）がアンセルムへの支持を表明することで、国王の主張を認めてもらうという使節団の使命は失敗に終わった [Wollaston, Herbert, p.28; E, HN, p.133.]。ハーバート＝ロシंगाは、その後もカンタベリーとヨークの間の首位権論争において、しばしば調停役を担わされている。1108年にはアンセルムのためにヨークを訪れ、1116 / 7年には、カンタベリー大司教ラルフ（在位、1114-22年）に同行してローマを訪問している [山代『ノルマン征服』 pp.50, 197-238.]。

ところで、12世紀に大陸で盛んとなる新宗派修道院であったアウグスティヌス派修道院のイングランド進出とノリッジ司教との関係はどうであったのであろうか。いま、ノーフォークに限定すれば、アウグスティヌス派修道院の著名な事例にハーバート＝ロシंगाは関与していなかったようである。代表例は、1146年第2代アランデル伯 William d'Albiniによって建設された Priory of St James at Old Buckenham、また、征服前からチャペルが存在し、1100年直後に Richelde of Fervaques が聖母マリアのために建設した聖所に、1169年頃に建設された Priory of St Mary at Little Walsingham、さらに、1102 / 1126年に Ralph de Tosny によって建設された Priory of St Mary and All Saints at West Acre などであるが、ハーバートはいずれの事例にも直接的には関係していないようである [Margeson, Normans, 57-60.]。

他のアウグスティヌス派修道院の初期の事例としては、1130年ころ建設された Pentney (Holy Trinity, St Mary & St Mary Magdalene)、1139年頃の Thetford (Holy Sepulchre)、1140年頃の Cokford (St Mary)、1189 / 99年建設の Mountjoy (St Laurence) などがあるが、いずれもハーバート＝ロシガ死後のものである [HRH,EW, pp.180-1, 185, 161, 176.]。したがって、ハーバート＝ロシガが、カンタベリー大司教アンセルムが好意的に支援したようには、同時代の大陸で新たな改革派勢力となりつつあり、またイングランドにも進出していったアウグスティヌス派律修聖職者たちに対して好意的な見解をもっていたのかどうかを知ることは困難である。

また、ハーバート＝ロシガ自身を積極的な教会改革者として位置づけることもできないであろう。かれが、国王ウィリアム2世の信頼があつく、イースト＝アングリア司教位を金銭の支払いと引き換えに獲得したことはよく知られている。その後、ローマ教皇のもとに出向き、悔悛後に再叙任されている。その限りでは、教会改革に賛同しているかのようであるが、ノリッジ司教区で妻帯聖職者たちが多かった現実については、みずからその問題を積極的に改革しようとした様子は見られず、むしろアンセルムに対して寛大な措置を期待する始末であった。したがって、少なくとも、積極的な教会改革者であったとは言いがたいのであるが、逆に、大司教アンセルムの熱心な教会改革運動に積極的に反対したという証拠もない [Wollaston, Herbert, p.28. 山代「教会改革運動とノリッジ」]。ハーバート＝ロシガの次のノリッジ司教 Eborard of Calne は、1121年司教に任命されたが、それまで国王チャプレンであった人物で、子供たちや多くの甥たちに取り囲まれていたという [Harper-Bill, Church & World, p.285.]。このことは、前任司教ハーバートの教会改革における不徹底ぶりを前提にした事態であったと想定されるかもしれない。

2 ノリッジへの司教座移動

ハーバート＝ロシガは、司教に就任してから、1094 / 95年頃にセトフォードからノリッジへと司教座を移動させている [Dodwell, Herbert, p.39.]。ペステルは、ハーバートの司教就任は司教座を移動させるためというよりも、司教区の確立に貢献するためであったと評価している。また、ドゥームズデイ＝ブックを手がかりにして、司教座のための土地を国王がノリッジで授与した可能性を示唆している [Pestell, MFS, p.205; Harper-Bill, Acta, p.xxvi.]。国王ウィリアム1世は、司教ハーファーストに司教座のために14屋敷地 (dwellings) を与えていた [DB, ii, f.117a; Harper-Bill, Acta, p.xxx.]。ハーファーストは、征服以前、ノルマンディー公ウィリアムのチャプレンであった人物である [WM,GP, p.150; Harper-Bill, Acta, p.xxvii.]。ノリッジにおける土地の賦与は、ウィリアム1世がハーファーストに、ノリッジで司教座を設立することを期待していたことを示唆するが、他方でウィリアム1世は、ハーファーストの死 (1084年) 後には、ベリー＝セント＝エドモンド修道院長ボールドウィンに司教座を受け入れるよう説得を試みていることも無視すべきではない [Harper-Bill, Acta, p.xxviii.]。ウィリアム2世とヘンリー1世の両者も土地

を授与しているようである [Saunders, First Register, f.2d.; Pestell, MFS, p.206.]。また、ヘンリー 1 世は、Norwich, Lynn, Hoxne における定期市に関するレント (rent) や諸権利を与えている [Wollaston, Herbert, pp.34, 50.]。

ノリッジは、アングロ＝サクソン期から市場が存在しており、いわば行政、社会、経済の中心地であったが、10世紀後半までに貨幣鑄造所 (mint) をもっていた。また、ノリッジには征服後、ウィリアム 1 世治世から王の城が設置され、イースト＝アングリアにおける国王行政の拠点となった。1086年までには、イングランドで第 4 位の大きさのバラであったようである。したがって、そこに司教座教会が建設されたとしても不思議ではなかった [Ayers, Site, p.63; Pestell, MFS, p.205.]。

ノリッジへの司教座の移動に関しては、その原因をめぐって検討が加えられてきている。ペステルは、都市ノリッジ内部でもスペースが不足していた状況から判断して、セトフォードを離れた理由が、通説で言われるような同地でのスペース不足であったとは考えられないとしている [Pestell, MFS, p.205.]。12世紀の歴史家ウィリアム＝オヴ＝マームズベリーは、交易で栄え人口が多い町への司教座移動をハーバート＝ロシングの「野心」に帰しているが、D. ウォラストンは、発展する商業中心地へ司教座を移すことは、ノルマン的政策に一致した行動であったと指摘している。さらにかれば、司教座教会の建設をハーバートのシモニア (聖職売買) をめぐる悔悛行為の表れであるともなす必要もないと主張している [WM, GRA, II, pp.385-6; Wollaston, Herbert, p.25; Dodwell, Herbert, pp.36-40; Harper-Bill, Church & World, pp.281-2; Harper-Bill, Acta, p.xxx; Saunders, First Register, f.4.]。

S. マルゲソンは、セトフォードと比べてノリッジは海に近く、経済的重要性が増大していったと指摘する。しかし、なかでも、司教座をサフォークのベリー＝セント＝エドムンド修道院へと移そうとする前司教ハーファーストやハーバート＝ロシングの試みが失敗した後、ハーバートはノリッジを中心とするノーフォークを重視する戦略に転換したとするペステルの見解は注目に値する。ベリー＝セント＝エドムンド修道院は、前司教との対立のなかで、1081年には司教支配からの免除特権を国王ウィリアム 1 世から得ることに成功していたのである [Gransden, Baldwin, pp.70-1; Margeson, Normans, p.41; Pestell, MFS, p.205.]。しかし、ハーバート＝ロシングのベリー＝セント＝エドムンド修道院に対する攻撃は続けられ、1101年ローマへ行く途中に奪われた身代金は、ベリー＝セント＝エドムンド修道院に対する自分の主張をローマ教皇に支援してもらうために用意していた活動資金であったといわれる。結局、その企ては失敗に終わった [Wollaston, Herbert, p.29; E, HN, p.133.]。

ハーバート＝ロシングは司教座教会と付属修道院の建設を開始した。かれの立場は、ノリッジ司教と付属修道院長を兼ねるものであった [山代『ノルマン征服』 pp.172-80; Harper-Bill, Church & World, p.282.]。すなわち、ノリッジ司教座教会は付属のベネディクト派修道院共同体

をもつことになったのである [Pestell, MFS, pp.207-8.]. そこには60名ほどの修道士たちがいたようである [Saunders, First Register, f.1.]. 司教座教会 (= 付属修道院) の建設に際して、ハーバートは、司教 (= 修道院長) として修道士集団 (司教座教会参事会) の財産を確保するため、司教との財産分割を実行し、修道士たちのために自己の所領の一部を与えたりしている [Saunders, First Register, f.1, f.3d, f.4; Harper-Bill, Acta, No.11; WM,GP, p.152; 山代『ノルマン征服』p.188.].

ノリッジ司教座教会を建設するため司教ハーバートは、国王たちの支援と市民たちの犠牲によって建設場所を確保していった [Pestell, MFS, p.205; Saunders, First Register, pp.24-5.]. ハーバートにとって、同時期に修道院教会堂を再建していたベリー=セント=エドムンド修道院との競争は何よりも重大な関心事であったようである。教会堂の設計は、お互いに競って、教会堂の長さを延長するために変更されていった。しかし、ハーバートの死亡時 (1119年) には、ノリッジ司教座教会堂はいまだ完成するにはいたらず、次の司教のときに完成する [Dodwell, Herbert, p.42.]. ライバル関係の厳しさは、ハーバートが、管轄司教であったにもかかわらず、1095年ベリーにおける聖エドムンドの聖遺物の移葬儀式に招待されなかったことからもうかがえる。ペステルによると、ハーバート=ロシガのノーフォークにおける一連の付属修道院子院の建設も、サフォークのベリー=セント=エドムンド修道院とのこうした競争の脈絡の中で理解されるべきである [Pestell, MFS, p.206.]. また、ベリー=セント=エドムンド修道院の教会堂再建のために納められていた税 (土地 1 カルケイト当たり 4 ペンス) の一部が、司教座教会建設へと回されたこともあったようである [Dodwell, Herbert, p.43.].

司教座教会の基盤整備のために、司教ハーバートは州長官 (シェリフ) ロジャー=ビゴッドと土地を交換している [Harper-Bill, Acta, No.21.]. 司教は、かつてセント=マイケル教会の土地であり、現在 Tombland と呼ばれる土地を、Taverham の土地と共に入手した。ロジャー=ビゴッドの側は、Silham の 1 カルケイトの土地と、セトフォード近く Wykes の 1 カルケイトの土地を入手した。その交換により、司教はノリッジに大規模な土地を獲得することで司教座教会の建設が可能となったが、それはまた城に近い場所でもあった。さらに、ハーバートは、1101年にはヘンリー 1 世から郊外のソーブ (Thorpe) 荘園を賦与されている [Saunders, First register, f.2, f.3; Harper-Bill, Acta, No.12; Pestell, MFS, p.210; Harper-Bill, Church & World, p.284; Dodwell, Herbert Losinga, p.43.]. B. エイヤーは、司教座教会と付属修道院建設のために、少なくとも 1 つの知られたアングロ=サクソン期の教会と、おそらく 3 つの教会が境内に取り込まれたと推測しているのに対して、N. タナーは 2 つと考えている。4 教会とは、Christ Church/Holy Trinity, St Ethelbert, St Helen, St Mary in the Marsh であり、タナーの場合は、市内で最重要の St Michael と、もう 1 つ Christ Church を挙げている [Ayers, Site, p.72, p.67 地図; Tanner, Cathedral & City, p.256.].

3 司教の統治戦略

1) 司教区戦略

ノルマン征服後のイングランド教会で見られた注目すべき特徴として、修道士たちが構成する参事会をもつ司教座教会の設立がある [山代『ノルマン征服』 pp.172-80.]。ノリッジ司教座教会もそうした事例のひとつであり、境内にベネディクト派の附属修道院をもっていた。こうして、ハーバート＝ロシंगाもノリッジ司教と修道院長を兼ねるという二面性をもつことになった。

それでは、ノリッジの場合、そこが修道参事会であるがゆえの特性や限界といったものを見い出すことができるのであろうか。カンタベリー大司教ランフランクにおいて見られたように、修道士出身司教が、修道士たちのために自分の財産の一部を修道士集団(参事会)に寄進することがあった。司教＝修道院長であったハーバートも同様の寄進を行っている [Harper-Bill, Acta, No.11; Wollaston, Herbert, p.34; 山代『ノルマン征服』 p.188.]。しかし、もし、ハーバートの財産賦与と、12・13世紀にノリッジ司教たちが、自分のハウスホールドのクラーク(聖職者書記)たちのために、個人的に自由になる聖職禄を十分にもっていなかったこととの間に、何らかの因果関係があるとしたら、それは司教の司教区戦略に影響を及ぼしたと言わざるをえない。当時の歴史家ウィリアム＝オヴ＝マームズベリーは、後続の司教たちが不満を言わないように、ハーバート＝ロシंगाが個人的な財産から寄進したと述べていることに注目すべきである [WM, GRA, I, p.589.]。

筆者は別稿で、ノリッジ司教区の司教たちによる小教区教会聖職禄の専有問題を検討したことがある。1066年時点で、ノリッジには23～25の小教区教会が存在していたが [Ayers, Site, p.66.], 1086年のドゥームズデイ＝ブック時点で、サフォークで364～422の小教区教会が、ノーフォークで217以上の小教区教会があった。13世紀末には、イースト＝アングリアで1349の小教区教会が存在することになったようである [Harper-Bill, Acta, p.xxvii; Harper-Bill, Church & World, p.283.]。別稿では、ノリッジのように修道参事会をもつ司教たちが、自己のハウスホールドのクラークたちのために自由になる富裕な聖職禄を十分にはもっていなかったことに注目した [Harper-Bill, Benefices, pp.129-30; 山代「排除と寛容」 p.57.]。

ハーバート＝ロシंगाにとっても、司教座付属修道院への個人的財産の寄進と、自分のクラークのための小教区教会の聖職禄専有とはどのように整合的に認識されていたのが問題になりそうであるが、11・12世紀のかれの在位期間には、まだ司教クラークたちの数はそれほど多くなく、かれらのための収入や年金の問題もそれほど重大なものとはなっていなかったのかもしれない。しかし、ハーバー＝ビルは、ハーバートが、司教荘園の十分の一税を、ノリッジの修道士たちに賦与する際に、すでに司教チャブレンたちが保有していたものを除く措置を取っていたことを指摘している [Harper-Bill, Acta, p.xlviii, No.11; Saunders, First Register, f.4.]。ノリッジ司教区に

において、小教区教会の聖職禄を寄進された修道院パトロンとして、修道院長でもあったノリッジ司教が、小教区教会の管理をどのような戦略にもとづいて進めていったのか、さらに検討されるべき問題であろう。ノリッジの50ほどの小教区教会のうち半数が司教座付属修道院に専有されていった [Tanner, *Cathedral & City*, p.269; Harper-Bill, *Church & World*, pp.292, 295.]。司教が、聖職禄を財源としてみなし、クラークのための聖職禄として獲得した可能性があるが [Harper-Bill, *Benefices*, pp.130-2.]、その場合、司教区のノリッジ市民との関係が問題となってくるであろう。なぜなら、聖職禄の専有は、小教区教会や市民たちからの司教座教会建設のための税の取り立て問題や、小教区教会が保証すべき市民たちのための司牧活動をめぐるとの問題を含んでおり、司教と市民たちとの関係に影響を及ぼしていたからである [Dodwell, Herbert, p.43; Tanner, *Cathedral & City*, pp.273, 277-80; Harper-Bill, *Church & World*, p.291.]。

ところで、ハーバート＝ロシंगाが、イースト＝アングリアのなかで付属修道院の子院を設立していったノーフォーク重視戦略とはどのようなものであろうか。たとえば、司教座教会建設のために修道士たちが一時滞在していたノリッジ市外にあったセント＝レオナルド付属子院 (St Leonard) は、かれらが司教座教会へと移って後も残存した [Harper-Bill, *Acta*, No.11.]。司教座教会の建設は遅れがちであり、ペステルの言うように、ハーバートはノリッジ司教座教会 (= 付属修道院) のシンボルとして、小さな付属子院を建設し維持したのかもしれない。セント＝レオナルズに付属して聖マイケルのチャペルが建設されていたが、それはおそらく計算された行動であった。なぜなら、以前に存在していた St Michael's Church on Tombland は、ノリッジ司教座教会建設のために破壊されてきており、同名のチャペルはそれに代わるものであったと見なされるからである。セント＝マイケル教会はそれまでノリッジで最も富裕な教会であったようであり、司教座教会設立のための基本財産を構成した可能性がある [Saunders, *First Register*, f.3; Wollaston, Herbert, pp.12-33; Pestell, *MFS*, p.208.]⁹⁾。

2) 経済的戦略

ノリッジ司教としてイースト＝アングリアの北半分のノーフォークを重視する戦略を取ったハーバート＝ロシंगाであったが、それは交易・市場支配という点で、具体的には、2つの主要港リン (Bishop's Lynn) とヤーマス (Yarmouth) を重視する戦略として現れた。ペステルは、両者の事例において、それらの発展の基礎として容易に理解できるような政治的原理が存在していたことが重要であると指摘している [Pestell, *MFS*, p.211.]。H. クラークたちも、リンとヤーマスでの修道院建設には共通した司教の動機が働いていたことを指摘している [Clarke & Carter, *King's Lynn*, p.413.]。

ハーバートは、リンにおいてはセント＝マーガレット修道院 (St Margaret's Priory) を建設し、土地や市場開設権とともに司教座付属修道院に賦与している [Harper-Bill, *Acta*, No.15; Clarke &

Carter, King's Lynn, p.1.]。リンは、塩生産において注目され、ミッドランドからイースト＝アングリアを經由して北海にいたる交易からの税収入が期待されていた。また、リンは海運面で、イーリー司教座教会(＝修道院)が保有するウイスベク(Wisbech)と競争関係にあった。ノルマン征服後、ウイスベクの重要性は増大するが、ノルマン初期には半島北部へ市場が新設され、大きな小教区教会が建設された。すなわち、教会や市場といったインフラ整備が行われていったわけである [Pestell, MFS, pp.211-2.]。

11・12世紀をつうじてウイスベクとリンはライバル関係にあったが、リンはいくつかの定住地との保有関係によって、ノーフォーク地方との結びつきを強めていく。12世紀リンの陶器製造は、明らかに、南や西ではなく、東のノーフォークの方を向いていた [Pestell, MFS, p.212.]。

両者の競合関係は、ウイスベクが早期に出発したのに対して、リンが後から発展していったと捉えることができる。リンの立地は、多くの支流によって特徴づけられており、南側がナル(Nar)川を含む多くの小規模河川によって横断された低い沼沢地にあった。新しい都市の初期のレイアウトからわかることは、まず、市場と歳市を司教が引き継ぎ、市場を高低水位の中間の低地に開設して市場とみなされなくすることで、国王から通常の市場税を要求されないようにしていたようである。また、司教ハーバートは、ベネディクト派修道院であるセント＝マーガレット修道院をノリッジ司教座付属修道院の子院として、波止場近くに建設することで通商をコントロールできる戦略的重要性をもたせている [Pestell, MFS, p.214.]。

リンは、内陸にある司教のゲイウッド(Gaywood)荘園に付属していたが、そのことにより、アングロ＝サクソン中・末期の集配地と結びついていた。ハーバート＝ロシングは、ゲイウッドの粉挽場・教会・司教直営地の十分の一税・塩田等を司教座付属修道院に与えている [Harper-Bill, Acta, No.18.]。南側は、他の荘園(GodscroftあるいはWest Acre)と境界を接していた。そこには、1101年頃にAll Saintsに捧げられた小教区教会がすでに存在していたにもかかわらず、同時期にハーバートがさらにセント＝マーガレット修道院を建設したことは、この地域全体での定住化が勢いを得ていたことを示している [Clarke & Carter, King's Lynn, p.113.]。12世紀初めまでには、リンの潜在的な交易力が活用されていったが、同修道院の建設は、経済的投資として、また、いくつかの潜在的ライバルである交易場所や定住地への対応として進められていった。さらに、市場や歳市に関する国王の認可を得ることは、商人へ保護を与え、地方的独占を確立するのを可能にしたであろう [Pestell, MFS, p.215.]。1106年頃、聖マーガレット祭市の賦与がヘンリー1世によって確認されている [Harper-Bill, Acta, p.14.]。

ハーバート＝ロシングは、港町ヤーマスではセント＝ニコラス修道院(St Nicholas Priory)を建設した⁶⁾。リンでの建設プログラムが競争的であったとすると、ヤーマスでのそれは緊密な保有上のコントロールを許す立地利用が可能であった。1086年ドゥームズデイ＝ブックによると、ヤーマスは、24名の漁民を有するバラで漁業拠点であった。そこに司教は、1101 / 1119年セン

ト＝ニコラス修道院を子院として建設したのである [Pestell, MFS, p.216]。それは、ニシンの漁期にのみ用いられたチャペルであった。教会堂がすでに建っていたが、ハーバートは国王ヘンリー1世から既存教会を再建する許可を得ている。司教は教会再建にあたって、既存のアングロ＝サクソン教会堂を破壊したようである。かれは、建設したチャペルをノリッジ司教座附属修道院へと賦与している [Harper-Bill, Acta, No.11.]。ヤーマスは、セトフォードやノリッジに匹敵するほどの教会収益を示していたが、それは通行税や漁業交易権からの利益にもとづいていたのである [Saunders, First Register, f.3, f.3d, f.4d.; Pestell, MFS, p.217.]。

ヤーマスの南に隣接してサウスウォルド (Southwold) という港町があったが、伝統的なベリー＝セント＝エドムンド修道院も同所に附属地をもっており、そこから毎年25,000尾のニシンを納入されていた。その港町はヤーマスが興隆することによって打撃を受けたはずである。こうした問題も、ノリッジ司教とベリー＝セント＝エドムンド修道院長との対立関係の中で検討することが重要であるが、たしかに、サウスウォルドに対するベリー＝セント＝エドムンド修道院の特別の配慮が認められる。従来、サウスウォルドの住人たちは、隣接する Reydon 教会を利用していたのであったが、1206年ベリー修道院はサウスウォルドに新たなチャペルを建設しているのである [Pestell, MFS, p.218; Scarfe, Suffolk, pp.125-6.]。

ノリッジ司教たちとの争いにおけるベリー修道院長ボールドウィン (Baldwin, 在位1065-97 / 98年) の対応をプロパガンダ的に述べている史料であるハーマンの『聖エドムンドの奇蹟伝』 (Herman's De Miraculis Sancti Eadmund, 1097年作成) は、「1088年が困難な年であった」と述べている。Robert de Curzun という騎士が、ノーフォーク州長官ロジャー＝ビゴットの許可を得てサウスウォルドを奪取しようとした [Pestell, MFS, p.218; Scarfe, Suffolk, p.125.]。しかし、かれは、聖エドムンドの働きによって、自分の計画を成功させることはできなかった。このエピソードは、守護聖人エドムンドの奇蹟的働きを強調しているのであるが、さらにそこから窺えることは、ヤーマス教会を所有するノリッジ司教からの圧力に対する警告であり、司教ハーバートの介入が挑発的で、その地域において歓迎されることのない競争をつくり出していたということである。さらに、ロジャー＝ビゴッドとノリッジ司教座教会 (= 附属修道院) の発展との緊密な結びつきである [Pestell, MFS, p.219; Wareham, Bigod, p.225.]。

司教座の移動先としてなぜノリッジが選択されたのかという問題に関しては、ノリッジのもっていた政治的・商業的重要性が指摘されるべきであろう。また、ノリッジへの司教座の移動が定期的に遅かったことも無視できない。附属修道院としてベネディクト派修道院が建設されたのは、ハーバート＝ロシंगाがベネディクト派修道士出身であったことが原因であったとしても、かれは常に巨大なベリー＝セント＝エドムンド修道院をライバル視せざるを得なかった。したがって、巡礼者を誘致し、経済的利益を増大させるための聖人を是非とも必要としていたのである。

ところで、ノリッジにはそれまでサフォークのベリー＝セント＝エドムンド修道院の聖エドム

ンドに匹敵するような聖人がいなかった。こうした背景において、1144年ユダヤ人たちによって殺害されたとみなされた12才の少年ウィリアムの話が、1169年ころノリッジ付属修道院の修道士 Thomas of Monmouth によって創作され喧伝されていく。トマスは、夢の中にハーバート＝ロシングが現れ、以前は司教座教会の建設資金のために土地が必要であったが、今では聖遺物をもって収入をもたらしていると語ったと伝えている [Margeson, Normans, p.68.]。ノリッジ司教座教会 (= 付属修道院) としては、ベリー＝セント＝エドモンド修道院や聖エセルドレダ (Etheldreda) を奉るイーリー司教座教会 (= 付属修道院) のような著名な聖人が不可欠であった⁷⁾。1151年聖ウィリアムの遺骸の移葬後には幻視 (幻想 visions) と奇蹟が起きた。しかし、聖ウィリアム崇拜は、1150 / 1 年ころをピークとして短期間でその推進力を失っていく。ノリッジの修道院共同体では、最初からウィリアムに関する疑問と留保 (reservations) が存在していたようである。たしかに、聖ウィリアム崇拜の事例は戦略的には失敗したとしか言えないのであるが、しかし、一時的にはあれ、巡礼者たちの獲得と経済的利益をもたらすことにはかなり成功したとみなすことができるのかもしれない。また、ノリッジ市民の側としては、聖人に関する信仰対象の移行はあったかもしれないが、聖人崇拜における信仰心の衰退といった事態が生じたわけではなかった [Tanner, Cathedral & City, pp.274-5; Farmer, Saints, p.438; Harper-Bill, Church & World, pp.303-4.]。

3) 社会的戦略

ハーバート＝ロシングは、ノリッジ司教としてイースト＝アングリアにおける象徴的な地位の確立をめざしていた。その場合、かれが、地域のほぼ中心に位置するセトフォードをどのように捉えていたのかが問題となる。ハーバートは、司教座をセトフォードからノリッジへと移動したのであり、他方、州長官であったロジャー＝ビゴッドは、セトフォードに新たなクリュニー派修道院を設立しているのである。

アングロ＝サクソン末期からノルマン期にかけてセトフォードは大いなる重要性を有していた。1071年から94年までの間、そこにはイースト＝アングリア司教座が置かれていた。しかし、ドゥームズデイ＝ブックによると、1086年までにセトフォードの衰退が始まっていた。そこには724人の市民 (burgesses) がいたが、224の空き家屋が存在していたようである。それに反して、ノリッジは興隆しつつあったことが知られる。それでもセトフォードは、依然として、各種の宗教施設をひきつける大きな町であった。何よりも地理的重要性が目される。それは2州にまたがり、重要な戦略的・象徴的結びつきをもっていた。ノーフォーク・サフォーク両州長官として、セトフォードにクリュニー派修道院を設立したロジャー＝ビゴッドの決定事情は容易に理解できる。同所に関連して、ドゥームズデイ＝ブックは13の教会を記録している。少なくとも1つの古いミンスター教会が存在したことが知られるが、おそらく、前司教ハーファーストが司教座教会

として使用していたものであろう [Pestell, MFS, p.224; Wareham, Bigod, p.228.]。

州長官ロジャー＝ビゴッドは、司教座がノリッジへ移動した跡に修道院を設立したと推測されている。1101年ハーバート＝ロシガとロジャー＝ビゴッドの間で行われた土地交換のように、多くの取り引きが、両者の動きの回りにあったようである。ペステルによれば、ノリッジとセトフォードの経済的発展は、部分的には国王やイースト＝アングリアの伯たちによって刺激を受けてきていた。ロジャー＝ビゴッドは基本財産を準備したのち、1103 / 4年に修道院を設立する。ルイス (Lewes) から12人の修道士たちが到着している⁸⁾。他方、司教ハーバートは、結局、セトフォードでは付属修道院の子院であれ、それを建設することはなかった。そのことは、かれが、なによりもノリッジにおける司教座教会 (= 付属修道院) の建設を確実にすることをめざしていたと想定されるのである [Pestell, MFS, p.225.]。

修道院を建設した州長官ロジャー＝ビゴッドにとって、セトフォードは両州の統治を行うために立地戦略的に重要であった。それがイースト＝アングリアの中心にあり、ノーフォーク・サフォーク南北両地域の境界上に位置していたからである。その意味では、セトフォードは、イースト＝アングリアの世俗的あるいは宗教的権威の守護者であった州長官や司教にとって共に重要であったと言えよう。とりわけロジャー＝ビゴッドにとって、セトフォード西側の修道院と東側の城をもつことで、その都市的定住地は、實際上、かれの力と富という「双子のシンボル」[Pestell, MFS, p.227.] の間に挟まれて位置することになったのである。

セトフォード修道院との関連で興味深いのが、地方有力者であったロジャー＝ビゴッドの埋葬をめぐるエピソードである。それは、教会や修道院が地方有力者との関係をどのように維持していくのかという問題でもあった。ハンス＝ヴェルナー＝ゲッツは、「司教 (聖人) の埋葬地は、政治の対象となった」と述べているが、地方有力者の埋葬も政治の対象となったと言える。ロジャー＝ビゴッドの遺骸をめぐる、かれの一族やセトフォードのクリュニー派修道院とノリッジ司教座教会 (= 付属修道院) との間で、その埋葬場所をめぐる対立が生じたのである [ゲッツ『聖と俗』 p.191; Pestel, Landscape, pp.189-92.]。

ロジャー＝ビゴッドは、かれの意志に反してノリッジ司教座教会に埋葬されることになったと言えるのかもしれない。家族はセトフォードでの埋葬を希望していた。他方で、ノリッジ司教による埋葬が司教権威への敬意を示すことであると主張された。ハーバートはイースト＝アングリア地域における司教の力と影響力の増大をめざしていた。かれは、司教区内にある修道院の免属特権には否定的であった。埋葬問題も、そうした司教の戦略との関わりの中で引き起こされた [Harper-Bill, Acta, No.22; Wollaston, Herbert, p.29.]。結局、遺骸への主張をめぐる、1106年国王法廷での裁判が行われることになった。修道院が設立される以前に、ロジャー＝ビゴッドが、自分自身と家族が司教座教会に埋葬されることを希望していたとする最終判断がなされた [Pestell, MFS, p.228; Harper-Bill, Church & World, pp.301-2.]。ロジャー＝ビゴッドやかれの家族

の魂の救済という面でも、また政治的側面からも、セトフォードはビゴッドの権力基地としての重要性をもち、一族にとって象徴的重要性をもつはずであった [Pestell, MFS, p.229.]。しかし、強引に遺骸をもち帰って埋葬したノリッジ司教の戦略の前に、家族の意図は実現しなかったのである。

ハーバート＝ロシングの社会的戦略のひとつとして病院建設を取り上げることもできるであろう [Orme & Webster, Hospitals, p.71 地図.]。かれは、ノリッジとリンにおいて2つのレパー（ライ病人、ハンセン病患者）用のホスピタルを建設している。ノリッジにおいては、レパー用の病院 St Mary Magdalene を建設したが [Wollaston, Herbert, p.33.]、ノリッジ市外のセント＝ポールズ＝ホスピタルは次の司教エヴェラルド（Everard）の時になってから完成した⁹⁾。病院の共通の特性としては、最初から修道院的体制（regime）が導入されていたことである。毎日8回の祈祷を遵守することが規定された。こうした施療院や病院の設立はノルマン征服後に流行していった。ハーバート＝ロシングの病院建設は、この新しい形の慈善活動を反映していたとも言えるが、それはノリッジ司教区の司牧者としての彼の立場にも合致していたのである [Rawcliffe, Leper, p.233; Pestell, MFS, p.221.]。この後、ノリッジ市内と郊外で、12ほどの病院が建設されることになるが、もうひとつの大きな病院が St Gile's 病院であった [Tanner, Cathedral & City, pp.269-270.]。

修道院建設による統治戦略と呼べる程度に、ハーバート＝ロシングによるホスピタル（病院・施療院）建設戦略があったのかどうかは明白ではない。しかし、司教区における病院建設は司教としてのリーダーシップが発揮されたとみなすことができるし、また、ハーバート＝ロシングが、若い修道士や聖職者たちの教育にも熱心であり、「司教の学校」と呼ばれる文法学校（grammar school）を建設したことも、ベリー＝セント＝エドムンド修道院長とのライバル関係においてそれを見るとき、単なる修道院長とは区別される司教＝修道院長としてのハーバート＝ロシングの特徴的な統治戦略とみなすことができるのではないか [Tanner, Cathedral & City, p.271.]。

おわりに

ペステルは、ノリッジ司教ハーバート＝ロシングの修道院建設を分析することで、かれには、ノリッジ司教座附属修道院の子院建設のための立地戦略というものがあり、それが、かれのイースト＝アングリア司教区統治のための政治的合理性をもつものであったと主張している。ハーバートによる司教座教会（＝附属修道院）の建設規模からは、ベリー＝セント＝エドムンド修道院と競争しながら、かれがノリッジ司教座の権威を高める決意をもっていたことが窺える。その場合、かつて、富裕なベネディクト派のラムゼー修道院長であったハーバート＝ロシングは、同時代におけるベネディクト派修道院の影響力の大きさを認識しながら政策決定を行っていったようである [Pestell, MFS, p.222.]。

ノリッジ司教座附属修道院は、ベリー＝セント＝エドモンド修道院を例外として、イースト＝アングリアにおける富裕な修道院となっていた。港町リンやヤーマス港での海上交易の増大は地域の中心的都市ノリッジの経済的拡大に貢献した。地方的拠点を発展させることにより収入増をすばやく実現できた。可能ならば、拠点に隣接する既存の競合事業を抑制することも実行された。ハーバート＝ロシガのリンとヤーマス建設は、イースト＝アングリア（ノリッジ）司教区の東西における地域的重要性をもつものであった。司教ハーバートにとって、サフォークにあったベリー＝セント＝エドモンド修道院へ司教座を移動する計画が失敗したことは、ノーフォークを重視する戦略への転換を余儀なくさせた [Clarke & Carter, King's Lynn, p.413.]。かれは、まず、イースト＝アングリア司教区の北半分を掌握すべく努力したのである。そのためには、世俗の支配者が地域統治のために城を利用したのと同様に、司教は宗教施設である修道院子院を立地戦略的に重要な場所に建設することで司教区統治をめざす戦略を採用していったのである [Pestell, MFS, p.223.]。

註

- 1) 本稿では紙幅の都合上、出典のみの註は本文中に表記する。
- 2) ノーフォーク州のノルマン期修道院については、Cf. Margeson, *Normans*, pp.40-60.
- 3) N. バトコック (Neil Batcock) は、ハーバート＝ロシガの行動・戦略を「司教帝国主義」'episcopal imperialism' と呼んでいる。Pestell, MFS, p.204, n.14; Batcock, Parish Church, p.188.
- 4) ハーパー＝ビルは、実際の移動を1075年頃と想定している。Harper-Bill, Acta, p.xxvii, n.17.
- 5) 市内の Tombland には、ロジャー＝ビゴッドやサクソン伯たち、そして司教の館が存在していたようである。Ayers, Site, p.71.
- 6) 現在、イングランド最大の小教区教会。Harrod, Norfolk, p.186; Seymour, Guide, p.113; Pevsner, NE Norfolk, pp.143-5.
- 7) エセルドレダは、679年に死亡したイースト＝アングリア王 Anna の王女であった。D. H. Farmer, ODS, pp.148-9.
- 8) ハーパー＝ビルも1103年頃の設立を示唆しているが、D. ウォラストンは、1107年に設立されたとする。Harper-Bill, Acta, p.xxx; Wollaston, Herbert, p.29.
- 9) 病院建設を含む死生観の問題については、山代「生と死」参照。

文献リスト

- J. W. Alexander, "Herbert of Norwich, 1091-1119: Studies in the History of Norman England," in W. M. Bowsky ed., *Studies in Medieval and Renaissance History*, Vol.VI (1969), pp.115-232.
- B. Ayers, "The Cathedral Site before 1096," in I. Atherton et al. ed., *Norwich Cathedral*,

pp.59-72.

- B. Ayers, *Norwich: 'A Fine City.'* Stroud, Gloucestershire, 2003 (1994).
- I. Atherton et al. ed., *Norwich Cathedral: Church, City and Diocese, 1096-1996.* London, 1996.
- F. Barlow, *The English Church 1066-1154* [1066-]. London, 1979.
- F. Barlow, *William Rufus.* Berkeley, 1983.
- N. Batcock, "The Parish Church in Norfolk in the 11th and 12th Centuries," in J. Blair ed., *Minsters and Parish Churches: The Local Church in Transition 950-1200*, Oxford University Committee for Archaeology Monograph 17, Oxford 1988. pp.179-90.
- G. Bosanquet trans., *Eadmer's History of Recent Events in England.* London, 1964.
- J. Campbell, "Norwich," in M. D. Lobel and W. H. Johns ed., *The Atlas of Historic Towns*, vol.2, 1975.
- H. Clarke & A. Carter, *Excavations in King's Lynn 1963-1970.* The Society for Medieval Archaeology, Monograph Series: No.7. London, 1977.
- DB: Domesday Book
- B. Dodwell ed., *The Charters of Norwich Cathedral Priory*, Part I. London, 1974.
- B. Dodwell, "Herbert de Losinga and the Foundation," in I.Atherton et al. ed., *Norwich Cathedral*, pp.36-43.
- D. Dymond and P.Northeast, *A History of Suffolk.* Chichester, U.K., 1995 (1985).
- E, HN: M. Rule ed., *Eadmeri Historia Novorum in Anglia.* (RS 81) London, 1965 (1884).
- D. H. Farmer, *The Oxford Dictionary of Saints.* Oxford, 1990 (1978) .
- V. H. Galbraith, "The East-Anglian See and the Abbey of Bury St. Edmunds," *English Historical Review*, 40 (1925), pp.222-8.
- A.Gransden, "Baldwin, Abbot of Bury St Edmunds, 1065-1097," *Anglo-Norman Studies*, 4 (1981) 1982, pp.65-76.
- C. Harper-Bill, "The Struggle for Benefices in Twelfth-Century East Anglia," *Anglo-Norman Studies*[*ANSJ*], XI (1988) , 1989. pp.113-132.
- C. Harper-Bill ed., *English Episcopal Acta VI: Norwich 1070-1214.* Oxford, 1990.
- C. Harper-Bill, "The Medieval Church and the Wider World," in I.Atherton et al. ed., *Norwich Cathedral*, pp.281-313.
- C.Harper-Bill, "Searching for Salvation in Anglo-Norman East Anglia," in C.Harper-Bill, C.Rawcliff, & R. G. Wilson ed., *East Anglia's History: Studies in honour of Norman Scarfe.* Woodbridge, 2002. pp.19-39.
- W. Harrod, *Norfolk: A Shell Guide.* London, 1982 (1958).

- C. W. Hollister, *Henry I*. New Haven, 2001.
- HRH, EW: D. Knowles et al. ed., *The Heads of Religious Houses, England and Wales 940-1216*. Cambridge, 1972.
- L. Landon, "The Early Archdeacons of Norwich," *Proceedings of the Suffolk Institute of Archaeology*, 20 (1930), pp.11-35.
- S. Margeson, S. Fabienne, & A. Rogerson, *The Normans in Norfolk*. Norwich, 1994.
- T. Pestell, "Monastic Foundation Strategies in the Early Norman Diocese of Norwich," *ANS*, XXIII (2000), 2002, pp.199-229.
- T. Pestell, *Landscape and Monastic Foundation: Establishment of Religious Houses in East Anglia, c. 650-1200*. Woodbridge, 2004.
- N. Pevsner, *The Buildings of England: North-East Norfolk and Norwich*. Haarmondworth, 1970 (1962).
- C. Rawcliff, "Learning to Love the Leper: Aspects of Institutional Charity in Anglo-Norman England," *ANS*, 23 (2000), 2001, pp.231-250.
- C. Rawcliff, *Medicine for the Soul: The Life, Death and Resurrection of an English Medieval Hospital St Giles's, Norwich c1249-1550*. Sutton, 1999.
- H. W. Saunders ed., *The First Register of Norwich Cathedral Priory. Norwich, 1939*.
- N. Scarfe, *Suffolk in the Middle Ages*. Woodbridge, 1986.
- J. Seymour, *The Companion Guide to East Anglia*. London, 1974 (1970).
- N. Tanner, "The Cathedral and the City," in I. Atherton et al. ed., *Norwich Cathedral*, pp.255-280.
- A. Wareham, "The Motives and Politics of the Bigod Family, c.1066-1177," *ANS*, 17(1994), 1995, pp.223-242.
- D. Whitelock, M.Brett and C.N.L.Brooke ed., *Councils and Synods with Other Documents Relating to the English Church*, Vol.I, A.D. 871-1204. Oxford, 1981.
- WM, GRA: R.A.B.Mynors, R. M. Thomson & M.Winterbottom ed., *William of Malmesbury: Gesta Regum Anglorum*, 2 Vols. Oxford, 1998.
- D. Wollaston, "Herbert de Losinga," in I. Atherton et al. ed., *Norwich Cathedral*, pp.22-35.
- ハンス＝ヴェルナー＝ゲッツ著、津山拓也訳「死に向けた人生？－中世の死生観－」同『中世ヨーロッパの万華鏡、第2巻、中世の聖と俗－信仰と日常の交錯する空間－』（八坂書房、2004）pp.135-203.
- 山代宏道『ノルマン征服と中世イングランド教会』（溪水社、1996）
- 山代宏道「中世イングランドにおける排除と寛容－教会改革運動とノリッジ－」『中世ヨーロッパにおける排除と寛容』（共著者：原野昇、水田英実、山代宏道、中尾佳行、地村彰之、四反

田想。溪水社, 2005) pp.33-66.

山代宏道「中世イングランドの「グローバリゼーション」－教会改革運動とノリッジ－」『西洋史学報』32 (2005) pp.44-61.

山代宏道「中世イングランドにおける生と死－聖人・治癒・救済－」『中世ヨーロッパにおける死と生』(共著者：水田英実・山代宏道・中尾佳行・地村彰之・四反田想・原野昇、溪水社、2006) pp.9-39.

The Governing Strategies of Medieval English Bishop:

The Case of Herbert Losinga

Hiromichi YAMASHIRO

This paper clarifies the characteristics of the bishops' strategies to govern their dioceses in Medieval England. Especially, the case of Bishop Herbert Losinga (1091-1119) of East Anglia will be examined. As the Bishop of East Anglia (Norfolk and Suffolk), he took the policy to regard Norfolk as more important part. What was his reason for this and his strategy?

Herbert Losinga was appointed the Bishop of East Anglia (i.e. Thetford, then the see) by King William II (1087-1100). He was said to have gained his post by committing simony (payment of money). The contemporary Church Reform Movement forced him to visit the Roman Papacy to do penance to be invested by Roman Pope Urban II (1088-99). Herbert supported the King in his struggle with Archbishop Anselm (1093-1109) of Canterbury over the Church Reform.

As his former predecessor Bishop Herfast did, Herbert tried his best to establish his new cathedral at the traditional Abbey of Bury St Edmunds. But he was not successful in his efforts. After his failure, he took the strategies to establish his rule and to show his prestige especially in the Northern half of East Anglia with its center at Norwich. His actions were understandable in the context of his rivalry with the Abbey of Bury St Edmunds and its strenuous Abbot Baldwin. He moved the episcopal see from Thetford to Norwich in 1094/95. The bishop started building the Cathedral Church and Benedictine Priory there. Norwich was economically a prosperous town already in late Saxon period and it became also a political center with the royal castle to govern the region of East Anglia. Bishop Herbert govern the area with the cooperation of Sheriff Roger Bigod.

To govern his diocese of East Anglia (i.e. Norwich), he took the strategies to build the Priory cells (religious houses and churches). Especially, the establishments of those cells of Norwich Cathedral Priory in Norfolk fostered the economic and social developments of the towns with new religious houses. Thus, Bishop's Lynn became an important town for maritime transportation and Yarmouth provided Norwich Priory with considerable economic profits from fishery and naval trade.

As Bishop as well as Abbot, Herbert Losinga took his strategies to build hospitals,

grammar school and religious houses in Norwich and East Anglia to show his pastoral leadership. This was in a point different from Abbot Baldwin of Bury St Edmunds. It was, after all, Bishop's governing strategy.